

(エ) 論文要旨

論 文 要 旨

申請者氏名 李 松

申請学位 博士 (経済学)

主論文題目

韓国における言語・教育政策からみた経済発展と近代化

Economic Development and Modernization from the Perspective of Language and Education Policies in South Korea

[]
邦文は4,000字以内
外国語は2,000語以内

1. 課題

本論文は開港以降の韓国の近代的要素の導入とその流れを追う。そして開港後の日本の統治下にあった朝鮮において、収奪ばかりではなく、戦後の韓国の経済発展につながる面が育まれていたことを証明していきたい。特に言語・教育政策が果たした役割と、後の韓国の経済発展との関連に注目してこれらを追っていく。

前近代社会から植民地になった朝鮮の場合、日本が持って来た近代的要素の朝鮮社会への移植が大変多かった。その例として、ここでは特に言語の統一とその普及、影響を考察したい。言語は単なる「ことば」のみならず、その社会における概念を表しているもので、概念がなければことばもない。近代的言語の整理と普及は、近代的な技術の取得や社会慣習、金融制度、土地調査等、さまざまな局面で基礎的な社会通年を「近代化」する下地となり、それが解放後の韓国の経済発展に与えた影響は大きいと考えられるのである。

2. 構成

ここで本論文の構成と各章の主な論点を紹介しておこう。

序論：研究の意義と方法

第一章 日韓の近代化過程の比較と言語・社会・経済：既存研究から学ぶ

第二章 開港前後から韓国併合直後の経済・社会的変化と言語・教育政策

第三章 日本統治期の言語・教育政策の展開と経済・社会的変動

第四章 解放以降の韓国社会に受け継がれたもの—経済発展の礎として—

第五章 結 論

参考文献

本論文は、四つの章に分けられる。

第一章は、東アジアの近代化に関する既存の先行研究を分析し日韓の近代化過程の比較を行う。日本は明治維新以降近代化の道をひた走り、帝国主義的拡張政策の担い手となっていく。しかしその行方は戦争へと至り、結果的にはこれに敗れ、国際政治の上ではいまだにその負い目を背負っている。しかし経済的な面では、戦後の日本は目覚ましい経済発展を遂げ、国際社会でその地位を認められ、欧米とともに世界経済を牽引してきた。

一方、韓国は外国勢力の侵略と日本の植民地支配を被り、戦後は朝鮮戦争で同胞同士戦うという不幸な状況下であり、経済は低迷し国民は飢えに苦しみ、あらゆる部分で回復の可能性すらなさそうだった。しかしそのような貧しい国だった韓国にも1960年代後半頃から変化が見られ、経済成長が著しく“漢江の奇跡”と呼ばれるようになり、北東アジアの強大国の一つとなった。この両国は果たしてどのようにこうした目ざましい経済発展を成し遂げ、北東アジアを主導する強国となり、どういった試行錯誤を経験したのだろうか。

この疑問点に対する回答の第一歩は、日韓の近代化が進んだ過程と対応、そしてその影響を明らかにすることであろうと考える。日韓の近代化の過程は、従来の中韓思想を中心に行っていた日中韓三国の秩序を完全に变化させ、伝統的な秩序を破壊させた激変をもたらしたということでもある。両国の近代化の過程に注目し、その性格や速度を異にする面を明らかにすると同時に、近代化過程における日韓それぞれの対応が近代化の実際にどのような影響を及ぼすようになったのかを考察する。

また、近代化の過程において特に言語と教育の役割に注目する。国家を維持して発展していく過程において言語と教育が担う役割は甚大である。近代化は西欧によって先行され、他の国はこれをモデルとして発展を追求していった。そのような姿は言語・教育的な面でも同様である。そのため、日韓の言語・教育の近代化過程の特徴を考察することで、日本が早い時期に近代社会を構築した根本的要因を把握することができると思う。

第二章は、開港前後（19世紀）から韓国併合直後（1920年まで）を中心として言語政策と経済との関係の分析をおこなった。開港前後の19世紀後半頃、東アジア3国が迎えた変化と影響はどのようなものであり、それにどう対処したかの比較を念頭において考察していく。韓国は1945年まで日本の統治下に置かれるという特別な状況にあった。他国に統治される状況になったのは不幸であったが、しかしまたそのことが、近代的な教育体制や社会制度の導入の大きな契機となったことも事実である。

韓国併合直後、朝鮮は言論、出版、結社活動などが保安法、新聞紙法を通じて統制され、朝鮮が主体となる国語の朝鮮語表記法、規範化を達成できない状況のままに置かれていた。こうした状況のなか、日本は朝鮮に対して「同化政策」を行い、近代的な金融機関、教育制度、私有財産制度法などを導入していく。この過程で、朝鮮語の整理、つまり言語の規範化が重要な課題として浮上した。朝鮮語の近代化、具体的には表記法の整理などが必要となり、同時に近代的教育を施行する必要性が出てきた。

韓国経済は解放以降30年余りの間、平均8%を上回る高い経済成長を成し遂げた。このような高度成長を支えた要因の一つとして、教育を受けた労働力があつたということは事実であつたといわれている。すなわち、植民地時代から戦後にかけての韓国の経済成長の背景には社会的に急速な変化が発生していたと思われ、その変化には教育が密接に働いていたと思われる。実際、明治維新後の日本の近代化を支えた大きな要素として、識字率の高さ、寺子屋の普及等が取り上げられている。

以上のことを踏まえた上で、本章では、韓国の開港以前（19世紀）から韓国併合以降（1920年代）までに限定し、近代的制度の導入とその前提としての言語の近代化—表記法の統一—の過程を追う。ここでは、①開港以前（19世紀）の朝鮮社会と周辺国の社会状況を取り上げ、②開港期（19世紀末）以降にそれがどのように変化したか、特に言語・教育政策に注目して考察し、③社会状況の変化にともなう1920年頃までの朝鮮社会において日本の近代的制度が移植されていった事実、などを明らかにする。

第三章は、1910年代後半から1940年代前半まで日本が第二次世界大戦へと至る時期にそれが植民地朝鮮に何をもちたらし、日本の近代的な技術、制度などを朝鮮社会がどのように受容したか、特に言語統一と教育制度による普及・影響を考察する。この視点から①1910年代後半の社会情勢と日本統治政策を分析し、②1920年代の社会情勢と日本統治政策（教育の普及と社会通念、経済状況、③1930年代から1940年代初期までの戦時中の社会情勢と日本統治政策（教育普及と社会通念の変化、経済発展の数値）を分析し、それぞれ朝鮮社会における日本の近代的制度と技術の移植、日本統治政策の変化による朝鮮社会の変動、特に言語・教育政策の変化と社会・経済的影響を分析する。

第四章は、解放以降の韓国社会に受け継がれたものと経済発展との関係の分析を行った。植民地時代に行われた言語統一政策と教育制度の普及の影響を経済発展の面から考察し、それが解放後の韓国社会にどのように引き継がれていったかを検証する。ここでは、①解放以降の韓国に引き継がれていった近代的制度のいくつかを事例としておさえ、②特に韓国の言語・教育政策による経済発展と近代化の関連性を分析する。

3. 結論

本稿では、開港以降の韓国における近代化について日本の場合と比較しつつ概観した。儒学者が中心となって政治を行い、漢文が中央政治の言語であつた朝鮮社会において、ハングルの整備の必要が認識されたものの、その整備に関しては混迷し、結局、併合以降日本統治下で総督府により表記法統一がよ

うやく実現することになった。

こうした形になったのは、日本が朝鮮半島を統治するにあたって、近代的な諸制度を移植し、経済的にも高めていくために、それが必要とされたことが背景にあったと思われる。目的は確かに植民地における「収奪」に相当するといえるのだが、それが朝鮮社会の近代化にもたらした影響は甚大なものがあった。たとえそれが植民者によるものであっても、近代的な諸制度の移植と運用のためには、漢文や儒教の通念だけでは表しきれない近代的な概念＝言語とその運用が必要とされていたのである。

そしてその運用のためには言語とそれに伴う「近代的な概念」の普及・浸透が必要であり、それについては日本統治下で急速に推し進められた教育制度の普及が非常に大きな役割を果たしたことは、本稿で掲げた統計等によって明らかである。また、それがいかに戦後の韓国に引き継がれていったかに関して、金融制度、土地調査等を追うことで、ある程度証明することができた。

このような議論はまだ初歩的なレベルにとどまっているが、開発と収奪によって二分化していた朝鮮近代の歴史分析に新しい視点を提示するという点でその意義を持つと思う。

それは日本の植民地が生産した結果物だけ注目するのではなく、植民地近代化が歴史的進行過程で同時代のどのような変数とからみ合って発展または屈折するのかに注目しなければならないということであるからだ。近代化を多様で、客観的な視点で見ることにより日韓が過去に対する一方的な評価にとられることのない関係を築き、未来志向の道を歩むことができることを望んでいる。